

「学校インターンシップ」の学びと教員養成

橋 本 祥 夫

1 現場実践型教員養成の中核となる「学校インターンシップ」

臨床心理学部教育福祉心理学科小学校教員養成コースでは、4年間を通して実地教育を重視した現場体験型教員養成を推進している。小学校教員を目指すにあたり、学校現場を具体的に知る機会をもつことは非常に重要である。特に、1・2年次の段階で学校現場の体験を通して学ぶことは、教職課程の授業についての学習の意義を理解する上で大きな意味をもっている。そこで、本学では、1回生から実地教育を重視し、学校現場で過ごす体験をもつことを通して、学校現場での児童へのかかわりを具体的に経験し、3回生での教育実習に向けた経験を蓄積することを目指している。

教員としての専門性の基盤となる資質能力を確実に身に付けさせるため、教育委員会と大学との連携・協働により、教員養成の高度化・実質化を推進することが求められている。中央教育審議会の答申¹⁾では学校インターンシップの重要性について、「学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握する

ための機会としても有意義であると考え。」と述べられている。さらに、その実施にあたっては、「既存の教育実習との間で役割分担の明確化を図るとともに、その円滑かつ確実な実施に向けて、受入れ校確保等のための教育委員会や学校と大学との連携体制の構築、大学による学生に対する事前及び事後の指導の適切な実施、学生側と受入れ校側のニーズを把握するための情報提供の実施など、環境整備について今後十分に検討することが必要である。」と述べている。

そこで本学では、宇治市教育委員会と京都市教育委員会との間で連携協定を結び、各市の小学校で、長期間にわたる学校インターンシップを行っている。

2014年度からスタートした授業科目「教育福祉心理学実践演習(学校インターンシップ)」は、春学期、秋学期各1単位の選択必修科目として設定した。2回生の学生を対象に、学校現場で過ごす体験を持つことを通して、学生が学校現場での子どもたちへの関わりを具体的に経験し、3回生での教育実習に向けた経験を蓄積することを目的としている。授業は隔週で行う。ゼミ形式で学校での学びを交流し、悩みを共有することを通して、学校現場での不安感を和らげ、教職への意欲を高めるとともに、各教員の専門領域を生かし、教育課題に対する実践力を育成する。学校での体験を振り返り、心理支援

的側面も含め、多元的な児童理解・学校理解を深めることを目指す。

実習校は、連携協定により、京都市と宇治市の公立小学校から公募した。春学期と秋学期で実習校が変わることもあるが、基本的には、春学期、秋学期を通じて、1年間同じ学校で実習を行う。学校には授業のない時間を使って週に1回は行くようにしている。年間を通じて実習を行うことにより、学校の1年間の様子がわかり、子どもたちや学校での教育活動をより深く理解することができる。こうした長期にわたる実習により、子どもへの関わり方や指導の仕方などの実践的指導力が身に付く。

学校インターシップの実習校に、教育実習の受け入れを依頼することになっている。したがって、2回生で学校インターシップを経験し、同じ学校で3回生の教育実習に行くことになり、2年間にわたって同じ学校で実習を経験することとなる。教育実習で初めて行く学校であれば、学校や子どもの様子に慣れるのに1週間はかかる。4週間のうち、始めの1週間は授業実践を行うことができず、慣れたころには実習が終わってしまうことが多い。しかし、学校インターシップで事前に学校に行っていれば、学校や子どもの様子も分かり、また学校も、教育実習に行くことを踏まえてインターシップでの指導をするので、教育実習をスムーズに行うことができる。

来年度からは、学校インターシップの枠組みを広げ、1回生からの授業科目とする。4年間を通じて、実地教育を行うことで、学校現場や教師の仕事についての理解が深まり、「教師になりたい」という意識を高めることができる。また、4年間の実地教育で、現場対応力や実践的指導力が身に付き、学校現場で必要とされる人材となることが期待される。教師という職業は、経験が大きな意味をもつ。教育現場でしか

学ぶことができない児童理解や指導・支援の在り方、学校組織における役割分担など、教職の実際について総合的かつ実践的な理解を深める。運動会や遠足などの学校行事にも積極的に参加し、学校における教育活動を幅広く体験することで、4年間をかけて、教員としての資質を高めていくことができる。

4年間の学校現場での指導経験により、即戦力としての実践力が身につくことが期待できる。このことが、教員採用にもつながると考えられる。また、ベーススクールで長期間実習することによって、同じ子どもに長くかかわることができ、自己省察を繰り返しながら、指導を改善していくこともできる。

2 学校インターシップでの学生の学び

では、学生は学校インターシップにより、どのような学びをしているのか。授業における活動報告では、主に以下のような課題が出されている。

①子どもとのかかわり方（インターシップ生としての立場）

②個別支援の必要な子どもへの支援・指導

①に関しては、子どもとの距離感が問題となる。学校に行けば、「先生」と呼ばれる。子どもたちや保護者からは先生という立場で見られている。しかし、学生は「先生」という立場になることに戸惑っている。それは「先生」という自覚がまだ十分育っていないことと自信がないこと、さらに、「インターシップ生だから」という意識があるからである。そのことにより、子どもとのかかわり方が友達関係のようになり、必要な指導が十分に行えないということがある。教育実習では授業を行うため、「先生」という立場で指導しなければならないことが増える。学校で指導する以上、常に先生という自

覚を持たなければならない。「先生」とはどういう存在なのか、長期間の実習である学校インターンシップで、少しずつ「先生」としての自覚が育っていくことが期待される。

②に関しては、実習先で、個別支援の必要な子どもへの支援・指導を任されることが多い。学校インターンシップの募集要項では、「活動内容は、指導補助であり、教員の代わりを務めることはできないことにご配慮願います。」と記載されているが、実際には、特別支援の必要な子どもや不登校傾向の子どもへの個別対応を任されているケースもある。募集段階や担当教員が学校を巡回した時に、趣旨は説明しているが、十分に理解されず、一人で指導を任されるケースもある。学校のニーズとインターンシップの趣旨との兼ね合いを図り、大学と学校がいかに協力関係を結んでいけばいいのか、これが学校インターンシップを行っていく上での課題である。

しかし、個別支援の必要な子どもへの支援・指導については、子ども理解を深め、実践的な指導力を付けることにもなる。課題が大きいからこそ、支援・指導が必要となる。学生自身が悩み、試行錯誤する中で、様々な経験をし、指導力を積み上げていくことは重要である。気を付けなければならないのは、学生がその問題を

抱え込んでしまったり自信や意欲をなくしてしまったりすることである。そこで、授業では、実習校で経験した様々な悩みや葛藤、疑問などを出し合い、学生同士で交流し、一緒に問題解決を図っていくようにしている。必要に応じて教員がアドバイスし、場合によっては学校とも協議することもある。学校インターンシップは、実習校に行くための時間と労力がかかるだけに、学生にとってやりがいを見出し、学びが大きいものになるよう支援していきたい。

3 学校インターンシップの学びを振り返る「教育フォーラム」

学校インターンシップの振り返りのための教育フォーラム（公開講座）を毎年12月ごろに実施している。本フォーラムは、1回生と2回生は授業の振替で参加するようにしている。2回生の代表の学生が、インターンシップの学びについて発表し、インターンシップを受け入れてもらっている小学校の校長先生とパネルディスカッションを行う。本フォーラムにより、2回生にとっては、インターンシップの振り返りの機会とし、受け入れてもらっている校長先生の話聞くことによって、次年度の教育実習に向けて自分の課題や展望を確認する機会とな



写真1 学校インターンシップの活動の様子



写真2 教育フォーラムの様子



写真3 インターンシップについて発表する学生

る。また、1 回生にとっては、次年度の学校インターンシップに向けて意欲と見通しを持つことができる。さらに、受け入れ校や保護者にも広く参加を呼び掛けており、学校インターンシップへの理解と協力を求める場にもなっている。

来年度から、学校インターンシップが1 回生からスタートし、実地教育のさらなる充実を図っていく。学校インターンシップを中核に据えた現場体験型教員養成により、教員養成の実を上げ、学校現場で活躍できる教員を育てていきたい。

参考・引用文献

- 1) 中央教育審議会教員養成部会 中間まとめ「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」平成 27 年 7 月 16 日